

(平
三十
国発後)

小論文

- ・問題は1～10ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二五〇点

次の文章を読んで、あとの問一～四に答えなさい。

高齢社会の最先進国である日本は、二〇世紀後半に平均寿命の三〇年延長という驚異的な寿命革命を達成し、いまや人口の五人にひとりが六五歳以上の高齢者となつた。二〇二〇年には四人にひとり、二〇五〇年には三人にひとりと、今後もさらに高齢者の比率が増えると予測されている。そのなかでもとりわけ、八〇歳、九〇歳、一〇〇歳代の「後期高齢者」の急速な増加、すなわち、高齢者人口の高齢化の傾向が顕著となる。欧米では高齢期の前半を人生の「第三期」(Third Age)、後半を「第四期」(Fourth Age)とよんでいるが、「第四期」の人口が日本だけでなく、いづれの先進国でも急増している。

普通に生きれば二〇年近くを高齢者として生きる大衆高齢社会となつた今日、私たちはいやおうなしに年をとつたらどう生きるかを考え、大衆高齢社会における理想的な高齢者像を目指して個人も社会も計画的に努力するようになつた。種々のメディアの報道や地域社会で催される中高齢者向け講座の演題などを見る限り、万人が目指すべきは「自立」「社会貢献」「生涯現役」であるようと思われる。これは一九八〇年代の終わり頃から欧米、殊に米国における高齢者政策・施策の基本理念となつている「サクセスフル・エイジング」(Successful Aging)の基本要件でもある。高齢期においても健康で自立し社会に貢献できるということを前提にするサクセスフル・エイジングの理念は、生産活動から退き、体力も気力も減退し、社会から離脱していくという従来の高齢者概念を覆して、高齢者の可能性を追求し、多くの不可能を可能に転換してきた。また、この理念はジェロントロジー(老年学)という新たな学問分野の発展にも大きな貢献をした。しかし、後期高齢者が前期高齢者を数においてしのぐ超高齢社会においてもサクセスフル・エイジング理念が政策・施策の、また高齢者自身の生活の指針となりうるかは疑問視されている。世界最長寿国である日本は他の国々に先駆けて超高齢社会を迎える。二〇世紀後半の寿命革命によって私たちに与えられた人生の第四期という新たなライフステージを充実して幸せに生きるための指針を示し、それに基づいて生活環境を整備することは二一世紀に生きる私たちの重要な課題である。ここではサクセスフル・エイジング理念の誕生と発展の地である米国における動向を中心にサクセスフル・エイ

ジング理念の功罪を論じ、人生の第四期といわれる後期高齢期を射程にいれた超高齢社会の指針の探索を試みる。

A 「サクセスフル・エイジング」という言葉を米国の著名な医学者であるジョン・ロウと社会学者のロバート・カーンが学術誌 *Science* に掲載された論文で用いてから、すでに二〇年になる。それまでは高齢者といえど研究者の関心は専ら成人病の克服に向いていたが、ロウとカーンは高齢者人口の大半を占める健常者に目を向けた。そして、正常なエイジングには「普通」のエイジングと「サクセスフル」なエイジングがあると区別し、単に疾病や障害がない「普通」のエイジングに対して、サクセスフル・エイジングに次の三条件を課した。(1)病気とそれに付随した障害が生じるリスクが低い。(2)高い身体機能と認知機能を維持している。(3)人とのつながりをもち、生産的活動に従事するなど社会に参加していきいきと生活している。この論文は大きな反響を呼び、マッカサー財団が全国規模の学際的チームによるサクセスフル・エイジング研究に巨額の研究費助成をただちに決定した。その後、一〇年にわたる膨大な研究成果に基づいて、ロウとカーンは一九九八年に「サクセスフル・エイジング」という一般人を対象にわかりやすく書いた本を出版した。その年のクリスマスプレゼントとしてヒットしたその本は幅広い年齢層の人々に読まれた。その本の中で彼らは、サクセスフル・エイジングは遺伝的要因よりむしろ、食生活や運動、知的活動、自己観、人間関係などの生活習慣によって強く影響されることを科学的データによって説明し、読者ひとりひとりがサクセスフル・エイジングの可能性を最大化するライフスタイルの選択をするよう奨励した。

その後、サクセスフル・エイジングの研究には米国、英国、ドイツ、北欧諸国において引き続き莫大な研究費が投入され、一〇〇〇を超える研究論文が学術誌に発表された。また、マスメディアでも高齢社会のキャッチフレーズとして広くもてはやされるようになり、「サクセスフル・エイジング」の考え方は、近年のジェロントロジー研究を牽引してきたばかりでなく、高齢期に対する一般人の認識にも大きな変革をもたらした。

サクセスフル・エイジングの理念は二つの大きな貢献をした。ひとつは、それまで医学、看護学、生物学、経済学、社会学、心理学、社会福祉学、建築学など縦割りの学術分野で個別に行われてきた高齢者研究を統合する概念的枠組みを提供し、学際的科学

としてのジエロントロジーの確立に寄与したことである。もうひとつの貢献はさらに広範囲な影響をもたらした。長年、高齢者研究は医学や生物学などいわゆる biomedical と総称される分野において、加齢に伴う生理的機能の変化や成人病の研究を中心として発達した。生理的老化の原因の解明や成人病の克服をめざす研究者のあいだでは人間の寿命をどこまで延ばすことができるかという共通の関心があつた。この目標はある程度達成され、二〇世紀後半に平均寿命は三〇年以上伸びた。しかし、人は長く生きるようになつたが、寝たきりの高齢者や退職後することもなく無為に生きながらえる人も多くなつた。そこで高齢者研究の課題は寿命を延ばすこと、すなわち量から、生活の質を高めることに移行していった。それは同時に、従来の高齢者研究が疾病や障害など高齢期の negative な側面に注目したのとは対照的に、高齢期における可能性、つまり、positive な側面に光をあてるにあつた。退職する年齢に達してもなお健康で自立し社会に貢献することができる。欧米(特に米国)のプロテスタン文化圏で人間の最も基本的で重要な価値とされる“自立”(independent)と、“生産的”(productive)であることを生涯継続する。つまり、中年期を人生の最後まで押し延ばすことをゴールにしてサクセスフル・エイジングの研究は進められ、その研究成果を踏まえて高齢者政策や施策が次々に展開、開発されてきた。その結果、食生活の改善や運動することを奨励する健康教育は多くの高齢者のライフスタイルに変化をもたらし、自立し生産的であることの必要条件である健康保持・増進に寄与した。リハビリテーション設備や技術の向上とサービスの普及は、従来なら生活習慣病に伴う身体的障害のために自立を失う高齢者が再び自立した生活を営むことを可能にした。また、成人教育プログラムや高齢者ボランティア活動の組織化と拡充は、新しい知識や技術を習得すると共に、社会に貢献し続ける場を高齢者に提供した。このように、サクセスフル・エイジングをスローガンとする研究や政策は高齢者の可能性を追求し、多くの不可能を可能に転換してきた。

それと同時に、高齢者向け雑誌から義歎洗浄剤や成人用おむつ、車椅子などの広告が減り、観光ツアーやウォーキングシュー
ズ、健康食品、中高年向け化粧品などの広告が多く見られるようになつた。平均年齢七三歳のサッカーチーム、九五歳の企業オーナー、母娘とあるが姉妹にしか見えない若々しい高齢女性などの写真が高齢者を代表するかのように登場する。米国最大の高齢者

団体である米国退職者連盟（AARP）の大会は、一見、高齢者に夢を売るレジャー産業の見本市かと錯覚するような様相になつた。多くの高齢者がそうした夢を実現していく一方で、後期高齢者の急増する今日、サクセスフル・エイジングのスローガンの元に描かれる高齢者像が必ずしも現実を反映しないばかりか、「サクセスフル・エイジング」＝「プロダクティブ・エイジング」（productive aging）という画一的な考え方は、“自立して生産的”でない高齢者に失敗者という自覚をもたらし、多くの人達は人生の最終コースを失意のうちに歩むという問題が高齢者自身からも高齢者ケアの従事者からも指摘されるようになつた。

サクセスフル・エイジング研究の集大成であるロウとカーン著の「サクセスフル・エイジング」^Bが出版された翌年、一九九九年の米国老年学会において、[The Paradox of “Successful Aging”: A Critical Look at Neglected Dimensions]^Bというテーマでシンポジウムが催された。おそらく、サクセスフル・エイジングの理念を根本から批判的に再検討する最初の企画であつたと思われる。他に数多くの興味深いプログラムが同時進行していたにもかかわらず大盛況であつたことは、このテーマに対する老年学研究者の関心の強さを示したといえよう。欧米諸国の研究者からなるパネリストは、それぞれ異なる観点からロウとカーンによるサクセスフル・エイジングの概念と研究の流れを批判し、新たな概念化を提示した。パネリストに共通する批判的のは、自立して生産的であるところ^Cことがサクセスフル・エイジングなのだという一義的な定義をすべての高齢者に画一的に適用することにあつた。サクセスフル・エイジングの形態は多様であり、現在の画一的なサクセスフル・エイジングのスローガンが、健康上の、あるいは、経済的な理由でそれを達成することができない高齢者に不当な不全感を与えていたという主張がなされた。

米国社会では、一人前の人間であるということは、自立して生産活動に従事する人間であることを意味する。幼い子どもをもつ親の目標は明確で、子どもを人に頼らないで自分の力で生きていく人間に育てることである。従来は、働いて収入を得る活動が生産的活動であるとみなされていて、退職した高齢者の多くが自分はもう半人前の人間になつたという認識をもつっていた。近年、productivityの概念の再定義がなされ、従来のように収入を伴う“経済的活動”だけでなく、家事・育児やボランティア活動のように、収入は伴わないが社会に直接的・間接的に貢献する“非経済的活動”も生産活動とみなされるようになつた。この新たなproductivityの定義によると、退職後もボランティアとして精力的に活動する高齢者（多くは前期高齢者）は極めて生産的だという

ことになる。productivity 概念の拡大は高齢期においても中年期の自己イメージの保持を可能にし、高齢者の幸福感や士気の高揚に貢献したこととは疑いない。

しかし、人口の高齢化に伴つて productivity 概念の再検討がなされた背景には、人生の終焉まで自立して生産的であり続けたいという、高齢者の強い願望があつたこと、また疑いない事実である。米国の高齢者にとっては、"自立して生産的である、"ことが自己目的化し、まるでイデオロギーのように信奉されているようにもみえる。少し誇張して言えば、強迫観念化して、すべてのものを犠牲にしても自立は固守するという姿勢を示す人が少くない。そうした人たちにとって、生産活動の停止は社会からの落伍であり、依存は社会的死を意味する。彼らは身体機能の衰えや収入の減少などにより、親族・友人・隣人とそれまでのようにならぬやりとりしたり、互いに助け合つたりすることができなくなると、一方的に援助を受ける依存（自立の放棄）を避けるために、しばしば関係から身を引いてしまう。周囲のサポートが最も必要な時に、人との結びつきを絶つことによって自立を守ることを選ぶのである。

自立の促進は日本においても高齢者関連施策のひとつとなるつてはいる。国や地方自治体、民間団体による高齢者の自立を促し援助する医療福祉制度やサービスだけでなく、医療技術の進歩や食生活の変化などによる高齢者の身体機能の保持、年金制度の成熟、家電製品や調理食品などによる日常生活の合理化、コンビニの普及などが、日本の高齢者の日常生活における身体的・経済的自立を著しく促進した。また、個人のライフスタイルと自己実現の追及は若年層だけでなく、中高年層にも浸透しており、身体的・経済的自立を基盤にして精神的自立も着実に進行している。社会と個人、双方のニーズを鑑みると、今後も高齢者の自立促進の努力は継続、強化されるべきであるし、実際、多くの高齢者が着々と自立を達成していくであろうと予測される。その一方で、ライフスタイルの個人的選択、自己実現の追及は人と人の結びつきにも変容をもたらした。世帯規模の縮小、単身世帯の著しい増加、人のつながりの希薄化という世界的潮流に日本も合流しつつあるように思われる。

老年学者の間には、ドイツの発達心理学者であるポール・ボルテスとマーガレット・ボルテスの提唱したS〇〇(Selective

Optimization with Compensation) モデルこそ後期高齢者を射程にいたサクセスフル・エイジングの理念であると考える人がいる。ところは、SOC モデルは加齢に伴う様々な機能の低下を認め、サクセスフル・エイジングとは残された機能や資源を最もうまく活用して充実した生活を送ることだと考えるからである。それは選択、最適化、補てんという互いに関連した三つのプロセスからなるという。(1)これまでやつてきた多くの活動領域の中から、自分にとつて重要で意味のある領域を選び、新たな目標を設けて生活の方向づけをする(選択)、(2)選んだ活動領域にまだ残っている機能や資源を集中的に投入して、新たな目標の達成をめざして努力する(最適化)、(3)失った機能を他の機能や資源でうまく補つて目標の達成を可能にする(補てん)。ボルテスはこのモデルを説明する際に、ピアニストのアントン・ルビンシュテインの晩年を例にあげた。二〇世紀の名ピアニストであつたルビン・シュテインは八九歳で引退するまで世界中で精力的に演奏活動を続けた。数多くの作曲家の曲を手がけ、広いレパートリーを誇つたが、高齢に達して身体機能の低下を認識した時にいくつかの曲を選択して、それだけを演奏することにした。そして、選択した曲をそれまでの数倍の時間をかけて練習し、さらに演奏に磨きをかけた。また、テンポの速い部分が以前のようなスピードでひけなくなると、音の強弱でうまくアクセントをつけることによって補つた。聴衆はそうした身体機能の低下を補う彼のトリックには気づかず演奏に聴き入つた。

たしかに、SOC モデルは後期高齢者をも含むサクセスフル・エイジングのあり方を提示している。しかし、地域社会で日ごろから高齢者ケアに携わっている専門家の評価は厳しい。彼らは SOC モデルが加齢による不可避な機能低下を認め、こうした機能低下や喪失に對して残された機能や資源をうまく活用して適応する方策を示したことは大いに評価する。しかし、これを実行するには絶えず自分の機能変化や資源を査定し、先を見て選択し計画する能力と意欲を必要とする。つまり、SOC は高学歴で、前向きで、周囲のサポートに恵まれた一部の高齢者にはよいモデルかもしれないが、万人向きではないと言う。

お年寄りやケアの専門家と話すると、SOC モデルに限らず学術の世界で高く評価されている理論や行政のうちだす政策・施策が後期高齢者の実態にそぐわないことにしばしば気づく。ジェロントロジーの理論家も含めて私たちは、八〇歳、九〇歳、一

〇〇歳代の高齢者の日常生活や生活環境をまだしつかりと把握していない。後期高齢期に関する研究は急速に進展している。殊に、生物学や生理学、医学の分野では後期高齢者の身体器官や機能に関する膨大な科学的データが集積され理解が深まっている。しかし、後期高齢者的心の状態や生活状況に関する理解は極めて限られている。例えば、後期高齢期に多い慢性疾患の影響はかなり理解しているが、大多数の後期高齢者が経験する緩慢な体力の衰えやちよつとした機能喪失の影響については理解していない。わずかな恵まれた例外を除いて、ほとんどの後期高齢者はたとえ病気はなくても身体機能の低下を経験する。ロウやカーンが奨励する賢いライフスタイルの選択や個人の努力は機能低下を後期高齢期まで遅らせるることはできても止めることはできない。この年齢になるとスピードやエネルギーが落ちる。起床すると衣服を着て、トイレに行って、歯を磨き、朝食をとるという何十年も毎朝やつてきたことをするのに何時間もかかる人もまれではなくなる。日中にうとうと眠ることが多くなる。以前のように何事にも気がまわらず、成り行きにまかせるようになる。また、多くの人たちが配偶者や兄弟、親しい友人を失う。子どもに先立たれる人も少なくない。次第に体力が衰え、生あるものの運命のきざしを認識するようになる。それに長い人生経験が加わると二〇年前の前期高齢期とは随分異なる心理状態にあることは十分推察される。しかし、私たちはそうした後期高齢者の心をしつかり理解していない。彼らの心の状態や行動を説明し予測する理論もまだ存在しない。また、後期高齢者はなお多くの可能性をもっているが、そうした可能性についても私たちはよく理解していない。

もうひとつ重要なことがある。それは、すべての生きるものを律する自然の摂理である。健康産業や美容業界のアンチエイジングのキャンペーン攻勢は私たちがいつまでも若さを保ち、また若さを蘇生して生き続けることができるような幻想を与える。メディアは九〇歳の岩山登山家や一〇〇歳の「起業青年」を大きくとりあげる。わずか五〇年前までは私たち誰もがいずれ死ぬのだということをはつきり認識していた。この厳然たる摂理を私たちは忘れてしまつたかのように思える。また、「死ぬこと」が話題にのぼると高齢にさしかかった人は口をそろえてPPK(ピンピンコロリ)を願望する。しかし、実際にはなかなかそうはいかない。私たち人間はごく身近にいる猫や昆虫、草木のような他の生きものと同じように自然の一部なのだとということをまず認識しなければならない。私たちの圧倒的多数は、この世に生を受けて年月をかけて成長し、やがて徐々に衰えた後にこの世から旅立つという人

生をおくる。この自然の摂理を再認識し受け入れることが、超高齢社会におけるサクセスフル・エイジングを実現する第一歩である。

現在、人生の第四期にある人たちの親や祖父母はそのような高齢まで生きなかつた。彼らは後期高齢期をマス(大集団)として生きる初めての世代である。大衆超高齢社会の到来といえる。したがつて、今日の後期高齢者は開拓者のごとく、彼らの歩む先に踏みならされた道はない。九〇歳をすぎてからの生活がどのようなものか想像できない。何ができる何ができなくなるか見当がつかない。この年齢で正常な身体機能や認知機能とは何ができるかを言うのかわからない。また、模範になるような先人もあまりいないので、九〇歳代を生きる準備はしていない。一方、後期高齢者の家族にとつても、親の傘寿や白寿を祝うと同時に、この先、何かと援助が必要になるであろう親の生活と自分の生活を考えて途方にくれる。そして、自分は親のようには長生きはしたくないと思つたりする。そこで超高齢社会におけるサクセスフル・エイジングのもうひとつ重要な要件は生活環境の整備である。約一〇年前に米国の社会学者マチルダ・ライリーは、ロウとカーンの貢献を讃えながらも、彼らがサクセスフル・エイジングの達成を個人々人のライフスタイルの選択や日常的な努力に帰属させ、家族やサポート・ネットワーク、高齢者サービス、地域社会、一般社会にある資源、すなわち、環境要因の影響を無視したことを鋭く指摘した。彼女は、個人のサクセスフル・エイジング達成を援助するそうした資源を、立法や政策、種々のプログラムなどを通じて社会が提供することの重要性を強調した。

日本では伝統的に高齢で身体機能や認知機能が衰えても家族と暮らし、自分の家で亡くなつた。その後、都市化、少子化、女性の労働市場参加、人々の個人主義、自立志向などの社会変化に伴つて、人生の第四期を住み慣れた地域で安心して住み続けることが難しくなつた。欧米の高齢者も同様の問題を抱えている。北欧の福祉国家は高率の税金を財源として高齢者の生活環境を整備してきた。その先進的施策はわが国でも広く知られている。米国は自助と共助が主流である。生活機能が衰えても、自助と共助によつて、住み慣れた自宅で安心して暮らせる環境づくりの試みが近年米国で注目されている。

私が三五年前、学生時代にお世話をなつた米国の中西部に住む教授を昨夏久しぶりに訪ねた。八〇歳代後半の教授夫妻は五〇年

前に購入した二階建ての家に現在も住んでいます。周りには昔からの知り合いも多いし、その住み慣れた家にずっと住みたいと願っている。しかし、ちょっと重い物を動かしたり、電球を取り替えたり、食料品の買出しに行くといった以前は何の苦もなくできた日常的な作業ができなくなつた。そうなると毎日の生活が苦闘の連続になる。常に不安である。車の運転も断念したので人付き合いもめつきり減つた。それでもなお、住み慣れた家でこれまでのよう自分らしく生きることを強く願つてゐる。

そこで、彼らはこの町で生まれ育つたが現在は東部に住む娘さんの助けを借りて自助グループをつくつた。高齢で生活機能は衰えているが晩年をずっと自宅で過ごしたいと願つてゐる近隣の仲間と組んで、手助けが必要となつた高齢者が生涯快適に安心して生活できる環境づくりに自ら着手したのである。六五〇ドル（独身者は四五〇ドル）の年会費を払つて参加すれば、あらかじめ資格やサービスの質をチェックして契約したホームヘルパーや大工、電気修理士、庭師、料理人、理容士、警備士、介護タクシー、便利屋を電話一本ですぐ手配してくれる。最近のニューヨーク・タイムズの記事によれば、米国にはこのような自助グループがすでに一〇〇以上あるという。大多数は行政機関ではなく、住民によつて組織され運営されている。NPOとして登録しているグループもある。会員の間でサービスを交換しているグループもある。ある人は他の高齢者のために電球を取り替えたり、家や家具の簡単な修理をする代わりに、毎月、病院まで車で連れて行つてもらう。地域での自助グループをうまく活用して自宅で生活することは、高齢者施設に入居するより経済的にもはるかに安価である。わが国でも、高齢者が立ち上げる自助グループではないが、必要に応じて様々なサービスを提供する同様なグループが住民や行政機関によつて組織されるようになつてきた。こうしたサービスは生活機能が減退した多くの高齢者が住み慣れた地域で安心して自分らしく生きる（Aging in Place）を可能にするひとつの方策であろう。

正直に言つて、人生の第四期におけるサクセスフル・エイジングの理念が何であるか明確に述べる確信はまだない。八〇年、九〇年あるいは一〇〇年の人生を歩んできた第四期の高齢者は各人が最もよい年のとり方を知つてゐるよう思われる。ひとりひとりにその人なりのよい年のとり方がある。「自立と社会貢献」というひとつのお決まりのサクセスフル・エイジング理念をすべての高齢者に押し付けるよりも、むしろ彼らにとつて大切で生きがいを感じるとは何か耳を傾けて聴き、それをサポートするほうがあ

よい。人生の第四期にある高齢者が家族や社会のお荷物になることを怖れたり、肩身の狭い思いをしないで尊厳をもつて自分らしく生きることができる社会をつくれば、ひとりひとりが自分の可能性を最大限いかして最もよい年のとり方ができると思われる。それは財政的にも他の方策に比べて高くなはない。このような社会が実現した時に我々は初めて心から長寿を祝うことができる。

出典 秋山弘子「自立の神話「サクセスフル・エイジング」を解剖する」 上野千鶴子ら編『ケアという思想』 岩波書店 二〇〇八年

問一 傍線部Aに関連して、ジョン・ロウとロバート・カーンの提案した「サクセスフル・エイジング」概念のはたした貢献について、二〇〇字以内で説明しなさい。(配点三〇点)

問二 傍線部Bに関連して、「サクセスフル・エイジング」に対してなされた批判について、二五〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問三 傍線部Cに関連して、productivity の概念の再定義が高齢者に与えた影響について、三〇〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問四 超高齢社会におけるサクセスフル・エイジングに関して、本文におけるジェロントロジー(老年学)での議論を踏まえながら、あなたの考えを六〇〇字以内で論じなさい。(配点一二〇点)